EAD による電子的検索手段のデータ記載形式

——いくつかの EAD 最良実践ガイドラインから——

Data format of EAD finding aids:
from an analysis of some EAD Best Practice Guidelines

五 島 敏 芳*
Haruyoshi GOTOH

最近、記録史料の電子的検索手段のデファクト国際規格 EAD, *Encoded Archival Description* (符号化記録史料記述) を、日本の記録史料の記述または目録へ適用する試みがある。しかし、それらは共通のデータ記載形式を持っていない。そこで本稿では、米国の EAD データ構成・記載形式についてのガイドラインの内容を検討し、記録史料管理上および技術上の要点を析出する。加えて同ガイドラインの一つに基づくデータ構築の支援工具作成の取り組みを紹介する。

Recently, we have got some case studies of an application of EAD, *Encoded Archival Description* to the Japanese archival descriptions or archival finding aids. However, those experiments do not have common data format. This article examines the structure and format of EAD data in some best practice guidelines for EAD (BPG-EAD) in America. It also extracts technical points about the data construction and archival management. In addition, it presents the approach of supporting tools for the EAD-data construction based on one of these BPG-EAD.

キーワード：EAD, 電子的検索手段, データ記載形式, 最良実践ガイドライン, 記録史料記述, 記録史料目録
archives, EAD, electronic finding aids, data format, best practice guidelines, archival description

1. はじめに

アーカイブズ（記録史料）へ到達するための検索システム、とくにコンピュータ上の検索システムは、実際にはさまざまに実現されている。たとえば、HTML の静的データで構成されていたり、市販データベース管理システムを使用して動的に検索結果を返すようになっていたり…、と技術的には多様な内部

が存在するだろう。ただし、それらのデータには、ふつう目録規則等の標準により構築された均質な検索手段（目録、索引等）を前提としている。コンピュータ上で実現する電子的検索手段については、そのデータのデファクト（事実上の）国際規格として EAD, *Encoded Archival Description* (符号化記録史料記述) があり、多くの記録史料管理主体（文書館、図書館アーカイブズ部門、資料館等の記録史料保存利用機関）が採用している¹⁾。

日本でも最近になって、日本の記録史料記述ないし目録に EAD を適用する試みが見られ、いくつかの機関では EAD をもとにした

* 国文学研究資料館
National Institute of Japanese Literature
E-mail: gotoh@nijl.ac.jp

検索システムが構築されている。しかし、同じように EAD を採用しながら、それらの EAD データは共通の構成や記載形式を持っていないようである。その理由の一つにつきのようなことがあげられよう：現在しばしば XML データとして構築され表現される EAD データは、文書型定義 DTD から一定の統制を受けるものの、その表現・管理のための技術的環境等によってデータ構成を変化させることができるほど自由度が高い。

いっぽう EAD を生み出した米国では、EAD データ構成・記載形式についての指針（ガイドライン）が存在する。それらガイドライン——多くは Best Practice Guidelines for EAD（EAD 最良実践ガイドライン）という言葉を含む——は、およそ EAD データの構成順に、必要なタグや属性を示し、それらへ格納すべき値やタグ・属性の用法を示している。それらのなかには、EAD によって検索手段を書き進める際、その具体的作業の順序に沿った EAD タグの詳細な解説・用例を示すものもあり、よりよい EAD の実践を促す内容となっている。

本稿では、これらの EAD 最良実践ガイドラインを概観し、そのなかの一つをとくに詳しく取り上げ内容を検討し、EAD データ構築上の要点を見出す。そして、この要点に基づいて記述データを作成する、市販応用ソフトウェアを用いた支援工具（ツール）を紹介する。このツールで前述ガイドラインの求める最低限の記載の一式を用意し XML ファイルとすれば、記録史料情報の共有の可能性にいつそう接近することになる。

2. EAD 最良実践ガイドライン

ここでは、EAD 最良実践ガイドラインとして、つぎのような例を概観する。

(1) RLG Best Practice Guidelines for Encoded Archival Description, 2002.8.^[2]

(2) OAC Best Practice Guidelines for Encoded Archival Description, ver.1: 2001.8. / ver.1.2:

2004.6. / ver.2: 2004.9.^[3]

(3) Library of Congress Recommended Best Practices for Encoded Archival Description Finding Aids at the Library of Congress (EAD Version 2002) DRAFT, 2003.8.-2004.12.^[4]

(4) Virginia Heritage Best-Practice Guidelines for Encoded Archival Description, 2004.3.^[5]

(5) Best Practice Guidelines for the Implementation of EAD Finding Aids in Florida Institutions, 2002.3.^[6]

これらのガイドラインのうち、(1)は RLG, *Research Libraries Group*（研究図書館連合）の RLG EAD Advisory Group による勧告で、他と少し性格を異にする。EAD 実践に際しての基本的条件を提示する内容で、必要最低限と思われる EAD タグ・属性を掲げ、必須・準必須・適用可能時必須・推奨・選択の順に重要度を付し、一覧表としている。同表には、既存の関連メタデータ類——ISAD(G)第2版, MARC21, Dublin Core の3つ——との対応を属性として格納するための値も示される。RLG は、その団体としての性質から、EAD 普及に大きな影響力を持ち、実際に(1)は他のガイドラインから参照されている。

(2)は、カルフォルニア大学総長事務局に置かれている電子図書館 CDL, *California Digital Library*が主導する OAC, *Online Archive of California*（カルフォルニア電子アーカイブ）の推進のために作成された。OAC は、EAD 発祥の地カルフォルニア大学バークレイ校図書館での UC-EAD プロジェクトが改名、展開したものである。検索手段としての一般的構成に沿って実際に EAD データを構築するばあい、もっとも丁寧でわかりやすい解説を用意していると考ええる。

(3)は、EAD の公式サイトをかかえる LC, *Library of Congress*（米国議会図書館）の Library of Congress EAD Practices Working Group による、網羅的内容の用法・用例集である。LC で提供する検索手段の検索と閲覧のサービスのため、そのもととなる EAD データの構築の実践・経験を蓄積した成果である。

う、辞書的に利用するのに適している。

(4)は、VHP, *Virginia Heritage Project* (バージニア遺産プロジェクト)のために用意され、Jay Gaidmore, Edward Gaynor, Jodi Koste, Susan Riggs 各氏により編集・作成された。目的のプロジェクトが、おそらく複数機関の共同作業を前提にしているためか、その内容も(2)に似て理解しやすい。また、かつてカルフォルニア大学バークレイ校図書館で EAD 開発を推進した Daniel V. Pitti 氏(のちバージニア大学人文科学先端技術研究所に所属)が、VHP のために作成した Encoded Archival Description Retrospective Conversion Guidelines (遡及変換ガイドライン)をもとにしている、というてんでも注目できよう。EAD2002 版に対応している。

(5)は、研究助成金を受けて推進した「フロリダ州内大学図書館における特別コレクションへの高度なアクセス」というプロジェクトに際して用意されたようである(あるいは「アメリカの遺産」プロジェクトの一貫か)。これも、複数機関のために作成され、Florida Center for Library Automation (フロリダ図書館自動化センター)ほかフロリダの 4 大学が参加機関となっている。RLG 勧告ガイドラインの前の作成であり、内容的に既に古い(その後更新されているかどうかは未確認)。

これらのガイドラインは、およそ各記録史料管理主体での EAD 導入にあたり、それぞれの事情にあわせて、たとえば EAD タグや属性に格納する値を変えていて、必ずしも汎用性があるとは限らない。しかし、記録史料の検索手段について、目録規則等が普及している前提から、一定の共通認識が存在し、それぞれが極端にかけ離れた内容になっているわけでもない。

ただ、本稿では(2)を取り上げて検討素材とする。その理由は、(2)が EAD 発祥のプロジェクトを前身とし、EAD 開発・発展とともに蓄積された実践による指針が存在と思われるためである。さっそく、同ガイドラインの構成と内容を確認していく。

3. ガイドラインの構成と内容

3-1. 符号化の枠組み

OAC の最良実践ガイドラインは、データ記載に関する基本的事項(技術的内容も含めた規則のようなもの)に続けて、まずマルチレベル記述の理解に紙幅を割いている。記録史料は、そのもととなる記録の構成に同じく、必ず階層的構成を持つ。記録史料記述では、その構成に対応するように階層的レベルを設け、それぞれの階層的レベルではその範囲の記述を与えるものとし、重複してはならない。そういった説明の後、もっとも高いレベル(フォンド fonds やコレクション collection 等)の記述は、どんな記録史料の検索手段においても省略できない、とする。つまり、記録史料の群全体の概要は、共有すべき基本情報として必須の内容である。そして、高位(フォンド)レベル、シリーズ series、ファイル file の 3 つのレベルの記述を持つ検索手段(後掲[C])を推奨している。

日本で伝統的に重要とされる 1 点ないし 1 件ごと(アイテム item - レベル)の情報は、ここでは必須条件ではない。むしろ群のなかの小群(シリーズ等の主要副区画)の部分の概要が必要だとする。ただし容器内一覧(コンテナ・リスト; 箱やフォルダへの収納状況の一覧)は、アイテム・レベルの情報よりも優先されることがある。米国の記録史料管理において、およそ資料の物的制御の基本単位がコンテナにあるという現実態を示唆するものかもしれない。

よって OAC では、3 つの符号化の枠組みの選択肢を用意している: [A]「OAC Basic」、群全体の概要記述のみ(コンテナ・リストが加わることもある); [B]「OAC Basic Plus」、群全体および小群の概要記述のみ(コンテナ・リストが加わることもある); [C]「OAC Full」、群全体および小群の概要記述・ファイル・レベル記述・コンテナ・リスト、または群全体および小群の概要記述・ファイル・

レベル記述・アイテム・レベル記述・コンテナ・リスト。記述は[A]<[B]<[C]の順に詳細になるが、複数の記録史料管理主体がそれぞれの所蔵記録史料の情報を共有する際の最低限の情報はフォンド・レベルにあることを示している。OACへ検索手段のEADデータを提供する機関等に求める水準は、最低限[A]であり、情報共有のために強い負担が小さくなるように工夫してある。

3-2. データの各部分

ガイドラインは、EADの基本的構成に沿っていくつかの部分に分けられて解説される。大きくは(1)前付け部分、(2)記録史料記述本体部分である。それぞれは、さらにつぎのように分けられる：(1-1)ヘッダ<eadheader>、EADファイルそのものの情報および技術的情報；(1-2)前付け<frontmatter>、主として凡例や検索手段全体に関する説明記述；(2-1)高位レベル記述（フォンド～サブフォンド・レベル）、<archdesc>直下にある群全体の記述、概要；(2-2)主要副区画記述（シリーズ～サブシリーズ・レベル）、<archdesc><dsc><c0x>内の小群の記述；(2-3)詳細記述（ファイル～アイテム・レベル）、<archdesc><dsc><c0x>内の各物的1点ないし1件の記述。なお、<c0x>のxは、必ず<(2-2)のx<(2-3)のx>となり、階層の深度にあわせて1ずつ増える。

いま述べた(1)および(2-1)と、(2-2)、(2-3)との組合せにより、EADデータに3つの類型を設けている。それらは<dsc>のtype属性値が、[a]「analyticover」ならば(1)および(2-1)+(2-2)、[b]「in-depth」ならば(1)および(2-1)+(2-3)、[c]「combined」ならば(1)および(2-1)+(2-2)+(2-3)、となる。およそ前述の、[B]（コンテナ・リストなし）が[a]と、[A]（コンテナ・リストあり）が[b]と、[B]（コンテナ・リストあり）・[C]が[c]と、それぞれ対応する。

以上の基本的構成を前提して、とくに記録史料記述本体部分で最低限必要なタグが示されている。付録の例をあわせて見ると大体、(2-1)は15、(2-2)は7、(2-3)ファイル・レベル

は5、(2-3)アイテム・レベルは6（電子オブジェクトへのリンクをつくるなら8）、となる（まったくの包装タグは含めていない）。大量のEADタグのなかで、どの記述部分に何を使用したらいいか、が明らかになった。EADデータを〈書き進める〉となると、慣れていない者にとって技術的に難解な(1-1)はもちろん、(2)の各部分のデータ記入について、具体的例示とともに解説されていることは、EAD理解を進展させるものだろう。些末なことだが、主要各タグのlabel属性や<head>（見出し）タグの各データ記入の具体例もあげられ、検索手段としての項目表現の用語も共通化を図ることができている。

記録史料記述の階層的配置としては、均衡のとれていることが求められる。たとえば、サブシリーズの記述と同じ（平行する）タグ階層にファイルの記述は混在できず、具体的には<c02>へ包含される<c03>の記述にはサブシリーズとファイルの記述を混在させてはならない、ということである。ただし、ファイル・レベルの不均衡は許容される。たとえば、あるシリーズの下に、一方ではファイルの物的1点が、他方には包材で括されたファイルの1点が配され、後者のもとにはさらに下層にファイルの物的1点がいくつか存在する、という場合である。なお、ファイルの記述については、無用な繰り返し記述を防ぐ階層的記述も許容されている。

これらは、いずれもつぎにみるデータ構築上の要点と関わるものである。

4. データ構築上の要点

4-1. 記録史料管理上または技術上の留意点

まず、記録史料情報の共有のための立脚点に注目しておきたい。その情報の提供に貢献する機関等の努力を最小にし、なるべく参加および情報を増やそうとする意図がうかがえることである。具体的には、求める情報の最低限の水準をフォンド・レベル記述のそれとし、記録史料の分析が不十分と思われる検索

手段の状態——[a]のようなフォンドとシリーズの記述のみ、また[b]のようなフォンドとファイルまたはアイテムの記述のみ、といった状態——であっても、利用者が記録史料を利用できる物的または電子的状態であれば、EAD データとして等しく提供する、ということである。[c]のような記述が完全に用意された検索手段でなくても、その記録史料管理の状態を前提として、一定の情報共有の対象とできるのである。

EAD データを XML によって実践し、XSLT によって表現するばあい、フォンド等の高位レベル記述で用いられるタグと同じ数のタグが下位の各レベル記述で必要とされるならば、表現の実用性が損なわれることを、かつて指摘した¹⁷⁾。日本での EAD 適用に際しては階層的記述で用いられるべき情報要素（いわゆる「史料目録」の記載項目）を各記述レベルごとに策定しておく必要をも論じたが、このガイドラインの示すところにより、一定の指標を得たことになる。日本では重視される出所・作成（<origination>タグ）や履歴/歴史（<bioghist>タグ）が、必須ではないことも注意しておいてよい。

一つの記述単位となるデータを階層的に特定するため、入れ子の状況（階層順）を数的に明記しない<c>タグは使用しない、ということも重要な選択である。もちろん<c>タグは、階層順が不定のばあいの柔軟な対応を確保できる利点があり、何らかの再帰的处理をおこなうプログラム等によって自動的に階層の深度を数値データとして取得できる。しかし、そういった処理プログラム等の存在を前提せず、EAD データそのものだけから階層順の数値を得ようとしたばあい、<c0x>タグの使用は適切である。

さらに、一つの記述単位となるデータの絶対的位置を特定するには、その<c0x>タグの属性として id を使用すればよい。このガイドラインでも検索手段の外にリンクされるデジタル・オブジェクト（電子資料体）との関係において id での特定を見ることができ¹⁸⁾。

このほか、たとえば年代<unitdate>タグを、標題<unittitle>タグと並列的に配置するか、同タグへ内包させるかも、表現時に影響するてんである。ガイドラインの例示は、後者であり、標題のなかに年代を含めて記す（おそらく）伝統的目録表現へタグを埋め込んだ形となっている。XML データとしては、並列的に位置するタグか別のタグに内包されるかタグかによって、当該のタグ内の情報を取り出す際に指定する深度が変化する。たとえば標題に内包されていれば、標題の情報を取り出せば年代の情報も取り出せる。このようなタグ配置の問題は、標題と年代に限らず他の項目にも見られる。

年代の情報のうち西暦は、ガイドラインによれば、国際規格 ISO8601 書式に準拠して（YYYY-MM-DD）標準化・共通化し normal 属性値へ格納する、という。日本では記録史料情報を電子化またはデータベース化する際、しばしば並べ替えのためのデータとして西暦（年月日）を、閏月等の存在により独自に数値化することもあったが、EAD において当該の属性値を使用する限り許容されない。つまり和暦は、擬似的に西暦数値化するのではなく、正確に西暦へ変換しなければならない。もちろん時期と場所により、ユリウス暦かグレゴリオ暦か、採用する西暦が分かれてしまう問題はある。このてんへの言及はガイドラインには見られないが、少なくとも一つの検索手段のなかで対象資料の年代的特質をふまえ、一貫性のある西暦データとすればよい（つまり、どちらかに統一すればよい）と考える。

4-2. EAD データ記述の伸縮性

EAD 適用の対象資料について、ここで取り上げたガイドラインは、およそ図書館所蔵の特殊資料やコレクション、個人書類・手稿や家族書類、比較的小規模の団体記録などを想定していよう。実際、規模の大きい政庁記録（公文書）、企業記録については、ガイドラインに言及がない（その関係機関に所蔵がないためか）。しかし、それらの記録の検索手段として EAD が適用できないことを意味

しない。

たとえば、伝来に関わる事情から複数の記録史料収蔵機関へ分割されて保存されているばあいや、物的形態により別々の保存部門へ収蔵されているばあい、各収蔵機関・保存部門単位で EAD 検索手段を作成し、それらを統合することができる。そのため EAD には、EAD グループ記述<eadgrp>以下、記録史料記述群<archdescgrp>、下位構成要素群記述<dscgrp>というタグのセットが用意されている。具体的には、複数の<ead>以下のデータを<dscgrp>で包装し、<archdescgrp>の下に並置し、そういった複数の<archdescgrp>データを<eadgrp>下に並置するかたちで使用する。

またたとえば、単一の（同じ出所の）記録史料について、同一収蔵機関で複数年次に渡り取得したばあい、単一の EAD データとすべきで、前述<eadgrp>は使用すべきではない、という。各取得年次の単位の一体性が重要であれば、その単位をサブフォンドやシリーズに比定して、一つの EAD データのなかへ記述する方法が考えられる。各取得年次の単位での検索手段のデータが大きくなることもあろう。そのばあい、それらをそれぞれ独立の単一の EAD データとし、全体を記述する EAD 検索手段を別に用意し、双方を記録史料参照<archref>によって連結する、という方法を EAD のタグ・ライブラリは示唆している。

これらの詳細は、タグ・ライブラリや DTD の指示に譲る¹⁹⁾が、記録史料管理の現実に EAD が技術的に十分対応していることを示しているだろう。

このほか、やはりガイドラインには示されていない細かいことだが、日本の記録史料記述へ適用する際に考慮しなくてはならない点として、簿冊のなかの詳細を示す件名目録への対応をあげる。この件名目録を EAD データとすることが困難であるかのように考えることは、まったくの誤解である。件名目録を EAD データとすることについては、ガイドラインにあるファイル・レベル符号化の例示

が参考になろう。EAD の DTD に用意されている物的 1 点の極小は、たしかにアイテムであり、簿冊の 1 冊は一見すると物的 1 点として理解できる。しかし、内容的には（さらに物的にも厳密に観察すれば）簿冊が、各件の記録史料 1 点から成り立っている、とも理解できる。よって、簿冊 1 冊のレベルをファイル・レベルと把握し、レベルを上について移動すれば、容易に件名目録を EAD データとして組み込めるのである。これを拡大解釈すれば、冊子型資料の内容目録にも適用できるが、本文符号化の範囲との調整が必要であろう。

以上から、記述レベルの設定の次第で、どのようにでも EAD データを構築できる伸縮性がうかがえる。

5. 記述データ作成の支援ツール

5-1. 支援ツール再考

EAD/XML データ作成の支援ツールについては、すでに前稿で市販応用ソフトウェアの利用による簡略な方法を紹介した¹¹⁰⁾が、その内容はきわめて不十分なものだった。当該の方法は実験的手法であったため、その後、筆者の所属の館でひろく実用されることはなく、考え方はともかく、定着はしなかった。

その主な失敗要因は、つぎのとおりである：a) 使用者との接触画面（インタフェース）の不十分さ、b) 複数ソフトウェアの使用による煩雑、c) 作業手続きの自動化の欠如。それぞれについては、およそつぎのことを指摘できる。a) については、EAD のタグが表計算ソフトウェアのワークシート上に見えてしまうことによる、一種の恐怖感をあげる。XML 等のコンピュータのデータの操作に不慣れな関係の専門職員にとって、いわゆる「史料目録」の記述に、いわゆる〈横文字〉のタグが混在するデータの状態は、挿入されたタグを理解可能な〈附箋〉として視認できず、難解なものと受容してしまうようである。b) は、a) の状況を強いられたうえ複数のソフトウェアの間でデータの切り貼りを要する作業が、

使用者にとって複雑な手順に思える、ということである。各操作の内容を理解することなく機械的に処理しようとする、一つ手順を間違ったときにはデータを破壊してしまいかねない。実際に操作の過程で誤りは発生していた。c)は、そういった誤りを防ぐため、また複雑・煩雑と思う使用者の心理的圧迫を軽減するために求められる要件であった。

前述の問題点を完全に解決するには、もはや支援ツールではなく、整備されたEADデータの入力・編集システムが必要である。それは技術的には実現可能であろうが、当該のシステムの開発や購入に要する費用を考えれば使用できる記録史料管理主体は限られるし、いまの日本の現状では対費用効果は明らかではない。そのため、あくまで身近な市販応用ソフトウェアで実現可能な支援ツールが必要であることは確認できる。

5-2. 支援ツールの考え方と紹介

現在、a)～c)のすべての問題点を解消できるよう努力しているが、本稿に紹介する内容はa)を改善した支援ツールのみである。ただ、その考え方の骨子は明らかにできるので紹介しておく[11]。

a)の解決は、単純なことではあるが、入力

フォームを用意することである。これは、とくに文章的（または文書的）に表現される記述（高位～主要副区画）については有効であると考ええる。記述から、EADデータとして反映できない書式的表現・割付け（レイアウト）・図表の側面を分離できるためである。また、いわゆる「史料目録」において一覧表的に表現されてきたアイテム・レベルのデータについては、罫で区切られた表に入力する画面も用意した。これにより前後のデータの参照に配慮できる。いずれも、入力項目の枠を明示することで、情報との1対1対応が可能になる。

b)・c)は、市販応用ソフトウェアとしてMicrosoft® Excelを採用することで解決しようと考えている。現行の支援ツールでは、Microsoft® Accessを用いているが、とくに<dsc>以下の<c0x>のデータが可変的に入れ子になる状態を、うまく表現できないためである（おそらく筆者の知識の不十分による）。いまはデータ入力項目にそくしてEADタグを付与しクエリー等で出力しているが、1レコードの範囲をこえて階層的にタグで包むようなことができない。Excelであれば、レコードの一括の区切りを判定して、単純に別の行

図 中間記述(subfondsレベル以下)

収蔵ID	DHDNIJL	註記号	30H	コード	1955008
階層位置	6.収集史料/7.信濃国/20.佐久郡小諸桑原家(扇屋)				
タイトル	6-7-20.佐久郡小諸桑原家(扇屋)				
(1)概要 (2)履歴/組織歴 (3)範囲と内容 (3)範囲と内容(続) (4)伝来/管理履歴 (5)付加情報 (6)注記等					
記述レベル	subseries	ref.年代		ref.出所/作成	ref.数量
年代(記述)	享保20.～明治32.(1735-1899)				
年代(上限)	1735	年代(下限)	1899		
出所/作成	桑原家(扇屋).				
数量(件)	540				
数量(記述)	540件.				
物的状態					

レコード: 501 / 535

図. EAD データ作成支援ツールの入力画面例 (Microsoft®Access97, シリーズ～サブシリーズ記述)

へ包み込むタグを置くことができる。これをマクロ等で処理すれば、手続きの自動化も実現できるだろう。

最良実践ガイドラインが示す EAD のタグや属性の用法は、各記述レベルでのデータ入力項目の選定や、データへのタグ・属性付与により、およそ支援ツールへ反映できた。しかし、id のような通し番号や階層表現用の数字を入力データからどのように自動発生させるか等など、今後検討すべき課題は多い。

6. むすびに

EAD の最良実践ガイドラインは、日本の記録史料の目録の EAD 化にも役立つと思われる汎用的内容を持っていた。そのガイドラインが、大量の EAD 情報要素のなかから、記述レベルごとに用いるべき分を明らかにしたことで、EAD データの各部分をデータベース的データとして扱うことができ、前述の支援ツールが実現できた。本稿がガイドラインから析出した要点は、少なくとも日本でも共有しうる EAD データの仕様の策定に寄与できると考えている。

参考文献

- [1] つぎの URL を参照のこと（なお以下の本稿の URL 表示は、いずれも 2005 年 4 月時確認）。<http://www.loc.gov/ead/>
- [2] もとは RLG の推奨応用ガイドライン（草稿版：1998 年 5 月）のようである。<http://www.rlg.org/en/pdfs/bpg.pdf>
- [3] 現在は基本的に第 2 版にアクセス可能。<http://www.cdlib.org/inside/diglib/guidelines/bpgead/index.html>
- [4] 最初の草稿版が 2003 年 8 月にまとめられ、その後は改訂を重ねつつ草稿版として公表を続けてきた。<http://www.loc.gov/ead/practices/lcp2002.html>
- [5] <http://www.lib.virginia.edu/small/vhp/download/VHBP2004.pdf>
- [6] http://palm.m.fcla.edu/ead/Florida_guide.pdf
- [7] 五島「EAD 表現のための情報要素：DTD 類と先行適用事例の表現構成の検討」（口頭報告）、「広領域分野資料の横断的アーカイブズ論に関する分析的研究」科研（代表：八重樫純樹，2001/2003）研究会・国文学研究資料館史料館共催公開シンポジウム「情報社会と archives」，2002 年 12 月 24 日（東京）。
- [8] この<c0x>タグの id 属性値だけでなく、<unitid>タグのデータおよび id 属性値も記録史料の記述単位を特定する情報だが、両者の関係についてガイドラインには言及がない。私見では、<c0x>を記述の id とし、<unitid>を資料の物的（実存的）id としてデータを格納すべきと考えている。つまり、後者<unitid>は資料番号（請求番号）と対応する。このように措置する理由として、日本の記録史料の検索手段の記述には編成上重出の可能性があることをあげる。重出した記述を別個のものとして識別できるようにしつつ、同じ物的存在としての資料を指示できるよう、id を区別しなければならない。なお、記述の重出は、基本的にリンクによる参照で回避できると考えるが、過去の「史料目録」をそのまま遡及変換する際に避けられない存在である。具体的には、つぎのように処理すればよいと考える：重出元の記述の<unitid>には id 属性値を格納し、重出先の記述のそれには id 属性値を格納しない、という処理をすれば、id として矛盾しない。
- [9] 注[1]に示した URL 下にある EAD2002 のタグ・ライブラリ（とくに<eadgrp>の解説）、または配布されている DTD を参照のこと。実際の適用は、国文学研究資料館において『史料館所蔵史料目録』を素材に試験中である。
- [10] 五島「日本の記録史料記述 EAD/XML 化と記録史料管理：記録史料管理過程における EAD 利用の位置をめぐって」『情報知識学会誌』第 12 巻 4 号，2003 年。
- [11] 詳細（とくに b）・c)の問題点の解決を含めた内容）は、近く別稿を用意する。